



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	農の字解
Author(s)	田中, 慎一
Citation	經濟學研究, 47(4), 12-24
Issue Date	1998-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/32089
Type	departmental bulletin paper
File Information	47(4)_P12-24.pdf



農の字解

田 中 慎 一

〔0〕 農や農業という文字は、もともと日本語ではなく外来語である、という奇妙に思われるやもしれない。それらは確かに日本の言葉になっているが、伝統ある大和言葉ではなく中国の漢字・漢語であったものが伝来しあとかも国字・和語といった日本固有のごときものになった、といえは誤解は生ずまい。とすれば、農業を今の辞典で引くといったことではなく、あらためて農の原義にさかのぼってみる必要もでてくる。さらにまた、農にあたるものが中国語以外の外国語ではどうなっているのかをたずねてみる、といった具合に問題を広げていくことができる。

こうした問題関心を筆者は、新渡戸稲造博士の主著¹⁾『農業本論』²⁾によって喚起させられ

た。本書の第1章第1項「農といふ文字の解釈」がそれである。この項にかぎらず全体についていえることだが、本書の理解には骨が折れる。名著³⁾といわれるわりに読まれることがはなはだ少ないと思われるのだが、その原因は今や古くなった書物というよりは文章の難しさにある。単に文体が古めかしいということではない。明晰さに欠けるのである。開拓者の労作の故そうになっているふしもあるが、なにか著者側の或る事情がそうさせているようにも感じられる。

いずれにしろ、本書から大いに学べるのであり、本書の論点を再構成しつつ部分的にでも発展させることが出来れば本稿の目的は達せられ、それが新渡戸の意にそうものであることは次の一文からうかがえるであろう。

1) 新渡戸稲造 (1862~1933) の著作では英文『武士道』が国内外で有名になった。*Bushido, the Soul of Japan* (Philadelphia, 1899) と矢内原忠雄訳『武士道 日本の魂』(岩波文庫, 1938年初版, 1974年改版)である。武士道の日本思想としてのユニークさを国際比較という方法でもって解明しようとしたものであったがゆえに、近代アジアの独立強国と自負した日本人、および脱亜入欧の新興国と注視した諸外国の識者に、日本思想解明の一書として評価されてきた。そして近代日本資本主義社会の精神の支柱としての武士道が読み取れるのではないかと筆者は考えつつある。したがって、このブックは新渡戸の代表作と目してしかるべきであるが、学術上の主著ということになれば話は別であって、次註のものがそれにふさわしい。が、いずれも生命力ある書物たることにかわりはない。因に、書物(ブック)の意義については内村鑑三 (1861~1930) が「日蓮上人を論ず」と題する一種の人物評論 (1896年)において次の

ごとく看破したところである——「然れども經典崇拜は偶像崇拜に優る、若し人類の技工にして拝すべきものありとすれば書物は最も崇拜の価値を有するものなり、故に木石を拝するを止めて經典を拝するに至り、人に依らずして法に依るに至りしは、宗教的思惟上非常の進歩と謂はざるを得ず、モハメッドが天隕石の崇拜を痛撃して之れに換ふるに「コーラン」を以てせしが如き、ルーテルが天主教のマリア崇拜を棄却して「バイブル」に縋りしが如き、皆な進歩的行為と言はざるを得ず、日蓮は木石崇拜の仏法を去て經典崇拜の仏法を造り出だせり」(『内村鑑三著作集』第16巻, 岩波書店, 1953年, 175-176頁。原文には部分的に傍点がつけられているが、この引用文では除いてある)なお、ここで内村鑑三をだしてきたのには理由がある。内村と新渡戸には好誼(よしみ。親しいつきあい、というより因縁)があったからである。ともに札幌農学校第2期生である。1877年に入学したこの2期生は20名だが(およそ16~18歳で東京

大学予備門と工部大学校予科の旧生徒が多かった), そのうち予定どおり4年後の1881年7月に卒業できたのは10名(足立元太郎・岩崎行親・内村鑑三・太田稻造・高木玉太郎・広井勇・藤田九三郎・町村金弥・南鷹次郎・宮部金吾)であった(『北大百年史』〔通説〕ぎょうせい, 1982年, 45-46頁, 56-57頁, 『北大百年史』〔札幌農学校史料〕(一) ぎょうせい, 1981年, 298-299頁, 555-556頁)。北辺にある異土もさりながら学業の厳しさが察せられる。因に, 新渡戸は数学に弱かったものの英学と農学に秀で上位グループに入っていたが, 数学にも強い内村は総合平均点で常に1番(当時「太田」姓を名のっていた新渡戸が叔父で養父の太田時敏宛にだした書簡, まず1878年1月2日付によれば, 内村89.6点で1番, 太田80.1点で7番, ついで1878年7月22日付によれば, 内村92.8点で1番, 太田82.7点で4番, さらに1879年2月10日付によれば, 内村94点で1番, 太田85.2点で3番), おそらく札幌農学校以来のいわゆる北大史において空前絶後の大秀才(天才的)と思えるほどであった(東京女子大学新渡戸稲造研究会『新渡戸稲造研究』春秋社, 1969年, 398-399頁, 404-412頁, 415-417頁, 参照)。現代日本屈指の文人だった伊藤整はその代表作の一つで「新渡戸稲造は美しい少年で, 頭が大変よく, その性格は柔軟明敏で, 心もまた美しかった。その親友の内村鑑三は, 目がきつく, 性格が激しく, 負けぬ気の少年で, 成績は新渡戸に次いでるた。」と書いているが(伊藤整『日本文壇史』1, 講談社, 1953年, 121頁), 性格描写はそれでよいとしても二人の成績の順序については事実誤認になっている。その内村も英学だけは新渡戸に及ばなかったのだから, 後年(1903年)小泉八雲(1850~1904, 本名Lafcadio Hean)が東京帝国大学文科大学英文科講師を辞職し(小泉八雲は東京帝国大学文科大学英文科の教授であったと書かれがちであるが, 間違いのようで彼は日本名をつけ帰化していたにもかかわらず1896年9月以降お雇い外国人でしかも講師であり, 彼の月俸は日本人教授の約2倍にあたる400円, のち450円になったが任用契約は毎年3月に更新されるという地位の不安定さがあって, それが現実のものとなり, すでに外山正一から井上哲次郎にかわっていた文科大学長名で1903年1月に解約を通告され, 3月辞職することに追い込まれる。江藤淳『漱石とその時代(第二部)』新潮選書, 1970年, 241-245頁, 参照), その後任の人材が検討された際いっとき新渡戸の名があがったらしいの

もある程度うなずけよう。現実には周知のごとく夏目金之助(1867~1916)が講師として就任するのであって, 彼は新渡戸の名に不快感を示したようであるが無理もない, 農学博士新渡戸に対するに文学士にして英国留学経験者, のちの漱石のプライドである。いずれにしる英文学の専門家とはみなされていないはずなのに, そうした候補のひとりになりうるあたり, 往時の札幌農学校がいかに異才をだしたかがうかがわれるし, 新渡戸の英文『武士道』にたいする当時の高評も察せられる。さて, こうした同期生で1878年6月2日ともに洗礼を受けた仲, しかも生涯にわたるプロテスタント, そのためか終始二人を親密な友人同士と見る社会的通念が出来あがってしまったが, しかし必ずしもそうとばかりは言い切れない複雑なものがあったように思われる。今そのことを具体的に述べることはしないが, 晩年(1928年6月2日)札幌農学校の第1期生二人(伊藤一隆, 大島正健), 第2期生三人(内村鑑三, 新渡戸稲造, 広井勇)の五人は自分たちに洗礼をほどこしてくれたM・C・ハリスの墓参(受洗して50年目を迎えることを記念)をし, みなで一枚の写真に収まっている(鈴木範久『内村鑑三』岩波新書, 1984年, 201頁)。真中に内村が座り, 内村から見て左に新渡戸, 右に広井が座り, 後列の左に大島, 右に伊藤が立つ。この, 五人が収まっている写真は妙なシンメトリーを感じさせ, あたかも一幅の絵画をおもわせる。新渡戸は温和な表情をしめしジェントルマンの風貌である。対して内村は厳しく文字どおり求道者のそれであるが晩年なりの穏やかさもただよう。広井は余裕ある風情で両腕を組んでいる。新渡戸はあたかも外側をかためるように左手だけキチンと膝においている。内村と新渡戸の背後に大島が陰のごとくたたずみ, 内村と広井の背後に伊藤が端正に立っている。中央で内村が全体をコスモスのごとく調和させるかのように両手のたなごころを膝の上で左右くみ合わせている。これと同日だがたぶんこのあとであろう, 新渡戸邸にもどってから四人が立ったまま収まっている写真があり(札幌市教育委員会編『新渡戸稲造』さっぽろ文庫34, 北海道新聞社, 1985年, 所収の友友浩稿の54頁), これも興味深いものだが, 広井がいないばかりか構図に難があって, その出来映えは前出の写真に及ばないと見る。実はここで内村・新渡戸と並んで特に大島正健(1858~1938)の名をだしたかったのである。彼は札幌農学校が生んだ最大(最高のそれは内村と新渡戸であろう)の教育者ではなかったか。

なぜ大島はそうになっていったのか。彼こそクラーク伝説の教祖となったふしがある。いわばクラークイズム（あるいは青年大志主義）はWilliam Smith Clark (1826～1886)の真意というより、その別離の言（クラークは実際には“Boys, be ambitious like this old man.”と叫んだらしい。これについては前掲『北大百年史』[通説] 60頁に掲載された貴重な引用史料をみよ。これは訳せば、「お前たち、初老のわたしの如く野心的にやれ」となるうか）をきいた日本人学生の脚色をおびた（like 以下の後半部分を切りすてた）独創的解釈（野心をもつが本来の意味である ambitious を大志をもつと訳出）といえるからで、それを直接に見聞したがゆえに生き証人あつかいされ、したがってその言が重きをなすことになった一人、大島正健がかかる伝説化の強力な喧伝者となっていったと考えられるからである。例えば、日本リベラリズムの旗手石橋湛山（1884～1973）は旧制甲府中学校時代、その校長であった大島正健より、このボーイズ・ビー・アンビシャス精神なるものを叩き込まれたようだ。石橋は大島校長から「クラーク博士の精神」を摂取し一生を支配するほどの影響を受けたらしく、それが習い性となって自宅の書斎にクラークの写真を常時かかげるまでになったという（長岡新吉「石橋湛山の『北海の開拓』論」北海学園大学『開発論集』第60号、1997年、参照）。中等教育時代に教師が生徒の人格形成や人生指針に及ぼす影響力のすごさを如実に物語る一齣である。もっとも、湛山79歳の時の回顧談では「ボーイズ・ビー・アンビシャス」が一度も語られない代わりにクラークの言と称して「ビー・ゼントルマン」という言葉を5回つづけて発している（石橋湛山『湛山座談』岩波書店、1994年、7頁）。晩年をむかえていた湛山にとって前者の言葉はいささか青臭すぎ最早魅力うすれ、後者の言葉なら、その時（1963年10月ごろヒヤリング開始）の座談の相手（佐伯尚美・林健久らの経済学者）と共有できると感じたからではないのか。さて、こうした教育者であった大島の学識は相当なものだったようで、それは新渡戸が専門的な質問をしたのに対して答えた大島の見解（「タ」にかなすること）が『農業本論』に紹介されていることからもうかがわれる。なお、大島正健のいう「クラーク博士の精神」なるものは札幌農学校出身者のうち、彼もそうだが特に教育界に入ってしまった者が例えば校長訓示といった必ず行なわねばならない式辞において有力な教育感化手段として改造・改良・錬磨していくうちに出来上がったものであろう。それはクラーク本人のあざかり知らぬものであっても、まことに

日本人の高い応用能力を示す一例であって、結果的には多感で前途有為の日本少年を鼓舞激励するに大いなる力を発揮することになった。それはクラークの名を上手に借用しながら実は、北辺の風土で青春期を過ごしカレッジ生活を謳歌した札幌農学校生の心意気を顕現する言霊（玉）だったのである。したがって「クラーク精神」などと称しても内実は空虚とならざるをえず、結局は高尚ながらも単なるスローガンのごときものにすぎず。例えば、1946年9月21日～10月6日「北海道・東北講演旅行」に出かけた矢内原忠雄（1893～1961）は札幌に着いた9月27日午後さっそく北大中央講堂で「内村鑑三と新渡戸稲造」と題して講演したあと、北大学生基督教連盟主催の夕食兼座談会に臨席したのだが、その時の有様を日記に残している——「この連盟なるものは東大のそれと同様につまらぬ事を言つて居る。彼等はクラーク精神の復興をスローガンとする。余クラーク精神とは何ぞやと聞く。彼ら答ふるを得ず。余問ふ、クラーク精神復興の実行方法として何をなすかと。彼ら答ふ、クラークの胸像の復興より始めんと。凡そトンチンカンなること斯の如し。」（『矢内原忠雄全集』第28巻、岩波書店、1965年、870頁）矢内原が終生二人の恩師としてあがめた内村と新渡戸、彼らの母校にのぞんだものの「クラーク精神」の実体にはさぞや遺憾の意を深くしたことであろう。像にするほど敬するなら博士にして元大佐クラークが書いたものを読もうとするはずだが、そうした関心はまず無いし、また学者とされているクラークの論文も価値あるものとして今に伝わるものは無いに等しい。ジョン・マキのあたかも日米二つの祖国への想いが込められたと見える労作、John M. Maki, *William Smith Clark: A Yankee in Hokkaido* (Amherst, 1975) 高久真一訳『W・S・クラーク』（北海道大学図書刊行会、1978年）からそう判定してよいであろう。例えば、「彼の専門分野においても公にした論文とて一握りのものであり、その主論文といっても全くの独力で作成したとは必ずしも言えないことなどから、彼を偉大な科学者と呼ぶのは無理というものである。」（「彼は偉大はおろか、一流の知識人にもなり得なかった。」（349頁））とされる。すでに1894年、内村は「私どもが札幌におりましたときに、クラーク先生という人が教師であって、植物学を受け持っておりまして。その時分にはほかに植物学者がおりませぬから、クラーク先生を第一等の植物学者だと思っておりまして。この先生のいったことは植物学上誤りのないことだと思っておりました。しかしながら彼の本国に行つて聞いたら、先生だいいふ化

「今農の定義を下すに先だち、第一着に其言語及び文字上の解釈を試みんとす。唯之を為すに当り、心中竊に数多の疑惑なきにあらず、切に世の識者の教と後の研究者とに待つや大なり。」⁴⁾ (圈点引用者、以下同様)

かように本稿は新渡戸の観点を多少なりとも深めていこうとするものだが、もう一つの副次的な目的がある。農の字解をととして、日本農業の分析視点につき若干の考察を加える、これである。以下、叙述の形でそれを示そうと試みるが、それが首尾よくいったなら、新渡戸の言

う後日の研究者、その一員に加わることが出来るという僥倖に浴しえることとなろう。

[1] ドイツ語。Landwirtschaftである。

Landは「土地」、Wirtschaftは「経済」または「経営」の義である。二つ合わさって「土地経済」または「土地経営」となる。新渡戸は「経営」の方だけを挙げているが、両者とも含蓄ありとすべきである。前者は土地にもとづく経済としての農業、後者は土地にもとづく経営としての農業になる。農業経済と農業経営の差に通じよう。

もっとも、新渡戸はWirtschaftを「秩序的に土地を使用し節約する」⁵⁾の義ともしているから、このばあい「経済」と「経営」の差は大きくないであろう。土地の合理的利用としての「土地経済」「土地経営」が農業だということである。そこでは土地が根幹にすえられている。土地の合理的利用となれば、地力再生産を維持するものとしての農法が組み込まれていなければならないことになる。徹底的に土地に密着することで成り立ちえる「経済」「経営」なのである。土地生産力に根本的に依存している。

とすれば、土地から離脱志向の施設型農業は所詮、農業コスモスの副次的部門にとどまらざるをえず、土地利用型農業経営（穀作経営と酪農経営——酪経営にあらず——がその代表部門）こそが農業の本位となるべきである。両者を混合すれば顛倒的把握になる。

Landを広義に解釈してゆけば「国土」となるから、「国土経営」の義も派生してこよう。「国土経営」としての農業、これである。「土地経営」をつきつめてゆけば、農地転用・不動産経営または「国土経営」になるともいえる。個別の「土地経済」「土地経営」を越えて、総体的な「国土経営」を形成してゆくものとしての農業である。環境形成要因として、その国土の風土や景観を過去から造りあげてき、現在そし

の皮が現われた。かの国のある学者が、クラークが植物学について口を利くなどには不思議だ、といって笑っておりました。」と内村一流の諧謔的だが飽くまで好意的に（クラークは学者というより教師、すなわち学問のInterestを起す力を持ち学問を青年に伝えられる技術のある人と評価して）述べていた（内村鑑三『後世への最大遺物』1897年初版、1946年岩波文庫版、1976年改版、50-51頁）。まことに内村が「日蓮上人を論ず」で批判したとおり、偶像崇拜が經典崇拜を圧伏するという顛倒的思考の一例である。仏教を仏像文化化した日本人の偶像崇拜を事とする性癖がここにも現われている。

- 2) 新渡戸稻造『農業本論』には次のようないくつかの版がある。①初版（1898年、裳華房）②訂正4版（1901年、裳華房）③増訂版（1908年、六盟館）④増訂改版（1912年、六盟館）⑤全集版（1969年、『新渡戸稻造全集』第2巻、教文館）⑥農文協版（1976年、『明治大正農政経済名著集』第7巻、農山漁村文化協会）——なお、復刻本に相当する⑤と⑥が底本としたのはいずれも③である。このうち現在もっとも入手しやすいのは⑥であるから、本書の具体的な箇所を参照表示するとき本稿は特別なばあいを除き、この⑥を註記することにし、その際、新渡戸（1976）〇〇頁のように表すことにする。
- 3) 東畑精一「新渡戸稻造」（『経済学大辞典』Ⅲ、東洋経済新報社、1955年、所収）、同「新渡戸博士とRuriology」（前掲『新渡戸稻造全集』第2巻、「月報」所収。同『農書に歴史あり』家の光協会、1973年、収録）、崎浦誠治「解題」（前掲『明治大正農政経済名著集』第7巻、所収）、岩片磯雄「『農業本論』の世界」（前掲『明治大正農政経済名著集』第7巻、「月報」所収）、盛永俊太郎『私と農学 名著を読む』（農山漁村文化協会、1980年）参照。
- 4) 新渡戸（1976）56頁。

5) 同上書、66頁。

て未来にわたって大なり小なり影響力を発揮するものとして運命づけられている、その国の農業という見方があらねばならぬ。

国土経営に重きをなす農業、これを欠いて国土経営の発展は望めまい。

なお、農に該当する他の代表的なドイツ語 Landeskultur については、それがラテン語からの派生語を含んでいるがゆえに後出のラテン語のところで言及する。

〔2〕英語（米語）。まず、Farming である。

農場経営の義としてよかろう。自己所有地のみならず地主に借地料を支払う借地によることもあるほど大規模な一円的な集積地（分散的錯圃でない）にもとづき、高度化労働手段にもとづく高い労働生産力で立ちむかう富農（利潤の成立余地ある農業所得）—農業労働者（雇用労賃）関係をもつ農場経営としての農業、Peasant ではなくて Farmer（農場主）による経営（雇用労賃・地代を支払ったあと農場主の家族労働報酬が充実するのみならず利潤も成立しうる）、しばしば「大農場経営」とイメージされるものがこれにあたる。これは Farmer 型農場経営で、日本の将来的な Farming はこれに限らない。Peasant が複数あつまり農業法人をつくることで Peasant 集合型農場も可能性としてある。

これらの日本的 Farming が実現される場として集落（Village 農村の部分たる小さい Hamlet 集落）が重要になる。集落（ムラ）の農用地が日本的 Farming に再構成されるといふ展望。

次に Husbandry である。これは家長専業農としての農業になろう。こうした義を求めるには Husbandry を派生させた Husband からみてゆく必要がある。まず古期英語（A.D.700—1100）としての Husband があり後で中期英語（A.D.1100—1500）としての Husbandry が 1300 年ごろ成立したからである。Husband の古期英語（Anglo-Saxon）時代の語形は Husbonda

で、Hūs（House 家屋）と Bonda（家屋の基礎になる土地をひらいて土着する）が合わさり、一家をととのえる家政の担い手（Householder 家長）になる。こうした名詞的意味の他に、もう一つの古義として「耕す」という動詞的意味がある。ここから Husband に夫の意味が持たせられてくる。家政にとって重要なのは耕すことであり、耕すのは夫の役目だったからである。因に、漢字の「男」は田と力に従っており、田の区画の形にかたどった「田」と、農耕具たる「耒」の象形である「力」とを合わせて耕作のことを示しており⁶⁾、日本語で「おとこ」とよむ、この男は田+力、すなわち田力であって田を耕す労働力そのものを意味し、それを代表するのは成人男子労働力であったから「たちから」（タチカラ）⁷⁾となり、Husband と比較すれば漢・和・英語でそれぞれ相通ずるものがあることになる。

なお、Husband によって確保される食・住と並んで大切な衣を確保するのは Weave（織る、編む）であるが、この役目は女の方だった

6) 白川静『字統』（平凡社、1984年）584頁、633頁、888頁。

7) 「純粹狩猟、或は漁撈時代には、個人の労働力は、集団全体の労働力の一部をなすにすぎなかったものだが、この段階〔日本古代国家成立以前に政治権力としての王権が発生してくる段階——引用者〕では、個人の労働力自体が価値をもち出した、ということになる。しかし水稻農耕の生産様式の上から、個々の労働力の協業は不可欠であり、従って個々の労働力の生産成果は、まだ集団全体のものとして所有される。恐らくこの段階で、個人の労働力を集団に提供する、という意識が次第に顕在化したものと思われる。国家成立後に、農民が国家におさめる田租を、古訓でタチカラとよむ根源は、集団に対する労働力提供というこの段階での意識にもとづいている。タチカラは、田力であり、田を耕作する労働力自体を意味する。この労働力自体の提供が国家への税となることは、田そのものが集団のものであり、その収穫物全体も集団のものである、という意識にもとづくものと考えざるを得ない。」（竹内理三編『土地制度史』I、山川出版社、1973年、22—23頁）

ので、妻を Wife と称するようになったのも同様ではあるまいか。

アングロサクソン語における耕すことで家政を担うという Husband から中期英語時代に Husbandry が生まれ、その古義は家政（例えば good husbandry 上手な暮らし方）であったが、のちに農業ともなったのである。しかし、以上のような語源的考察を経れば、Husbandry はただ農業というより、家長専業農としての農業と考える方が認識を進めたことになる。このように家長専業農の義をみとめれば、農業の担い手という含意があることになる。

例えば、基本的な担い手が主婦であるなら、いわば Wifery（こういう単語はないから、正確には Housewifery というべきだろうが、あくまで Husbandry とのアナロジーからである）としての農業であろうし、基本的な担い手が老人世帯であるなら、いわば Wifery と同様な意味で Grandry としたの農業になっており、そうなら Husbandry としたの農業からはずれていることになる。なお、Housewifery 家事としての農業には、意味深いものがある。

要するに、その国の農業に Husbandry としたの展望がひらけているか否かは一つの問題でなければならない。

さて英語（米語）で農業といえば普通は Agriculture となるかもしれないが、これは本来ラテン語からきているので、次にあらためて述べることにする。

〔3〕ラテン語。英語の Agriculture（これに類する西欧諸国語）はラテン語の Agricultūra ないし Agricultiō からきており、さらに Agri は Ager から、cultūra ないし cultiō は colō からきている。つまり Ager（土地）と colō（耕す）が合わさったもので、「土地を耕す」がその義である。

前述の Landwirtschaft とは別にドイツ語で農業を意味する Landeskultur も、Agri(Ager) が Land に代わっているが、その語源は

Agriculture と同様、土地を耕す義なのである。こうした Agriculture に類する欧米語の語源としてのラテン語には農業における耕すことの根本的な意味が込められている。

ところで、Agriculture から Agri が切り離されると Culture が残る。普通 Culture は文化で、この Culture だけみれば土地の臭いはまったくない。したがって Culture に耕すという意味があったし現にあることなど忘れられるか等閑視されてしまう。土地から離脱すれば大いなる誤解、錯覚が生まれる一例だ。これで日常生活は特に支障がなく、場合によっては都合がよいのかもしれないが、社会的錯覚である。顕現しやすい天動説的な Culture と、認識しづらい地動説的な Agriculture との落差といってもよい。

耕すという Culture が根底にあって、修養⁸⁾としての Culture である学問や教育が花ひらいてゆく。それは「心耕」でもあるのだろう。

〔4〕中国語

農の字源を考えてゆくと、その字形が『康熙字典』（清の康熙帝の命により1716年成る。中国の字書で空前の4万2174字を収め、まず部首別そして画数順に排列し、以後でる字書の規範となる。これを超えて絶後的な4万8904字を収めるにいたった諸橋次博士の『大漢和辞典』13巻もこの排列を基準にしている）をよりどころとし、そこで標準とされた文字であるがゆえに正字と呼ばれ、わが国の漢和辞典に親字（見出し文字）として出てき当用漢字（1946年制定）さらに常用漢字（1981年制定）とされ今ふつうに用いられている「農」よりは、その旧字形であって、字音も意味も標準的な字体としての正字と同じながら字体が異なるところの異体字、そのなかでも本字もしくは古字にあたる「農」の方が有用である。変形の度合いがまだ少ない「農」なら金文（このばあい中国の青銅器に鋳

8) 前掲『後世への最大遺物』59頁。

込まれた文字でおおよそ西暦紀元前11～前3世紀のもの)の字形がわりと残っているし、中国青銅器時代⁹⁾におけるその字形はその前史たる中国新石器時代末期(無文字時代から文字時代への転換期)における甲骨文(亀甲や獣骨に刻まれた中国最古の文字でおおよそ紀元前14～前12世紀のもの)が発展分化したもので、たとえ文字としての展開過程で変形をこうむっていても、依然として古代世界にリンクしているからである。

それにひきかえ現代中国語では古くから(唐・宋以降)民間で非公式に用いられてきた略字としての「簡体字」をふまえつつ新たに規範文字化させた「簡化字」(簡体字ともいう)があみだされた。その造字基準はひとえに書写を安易にするための簡略化(例えば画数を10画以内に縮める企て)にあり、その結果プラスイメージされた「簡化字」という一種の新字体が或る正字に出来てしまえば、その正字はマイナスイメージされた「繁体字」と目され結局は旧体字あつかいされる。そのため、このばあい「農」どころか「農」すらが旧体字となってしまう、まず「衣」、ついで「衣」(「衣」の第4筆めは例えば「衣」の第4筆めと同様に書くときはレのように続けるから1画と数えるが、活字では2画のように見えるから総画数も6画のはずが7画と誤解されやすい。そこで思い切って「衣」のごとく第4筆めを文字通りレとしてしまえば、第4筆めが1画であることは明瞭となる。これが

同じ簡化字のはずなのに「衣」から「衣」へと微妙に変形している理由なのではなかろうか)に置き換えられているのである。

さて、そもそも「農」から「衣」への変形には、一見すると必然性があるように感じられるが、両者にみられる外見上の類似性は表面的なものにすぎない。内発的に変化した結果として出来たという意味での合理性はない。両者の字構造は似而非なるものである。「農」の部首は「辰」(たつ)であるのに、「衣」の部首は「一」(わかむり)となっている¹⁰⁾からである。部首以外のところでも字構造上の連関性は認め難い。

いわば部首法万能論から、こう言っているのではない。部首法を万全とする立場をとっているわけではない。むしろ部首法の墨守一点ばかりには不備があるようだ。部首別を至上とする機械的な部首法ではなく、全面的ならざるも意味のある部首別が重要なのである。字書が部首別の排列をする際の部首法は『康熙字典』のそれに従いがちであるが、その部首法はいつでも漢字の構造に即しているとはいえず、また検索に不便をきたすことがあるにしても¹¹⁾、漢字の成り立ちとその根本義からして部首別が尊重されねばならぬことにはかわりはないであろう。

字音別の排列をとる字書があまりになつたことはそれ相応の根拠があるにしても、漢字の構造法にかんする六書¹²⁾(象形・指事・会意・形声・転注・仮借)のうち、形によって文字を表記する方法にもとづいて成った象形文字・指事文字・会意文字は完全な表意文字であったがゆえに、部首の変改はその表意的な構成の土台をゆるがすことになるだろう。

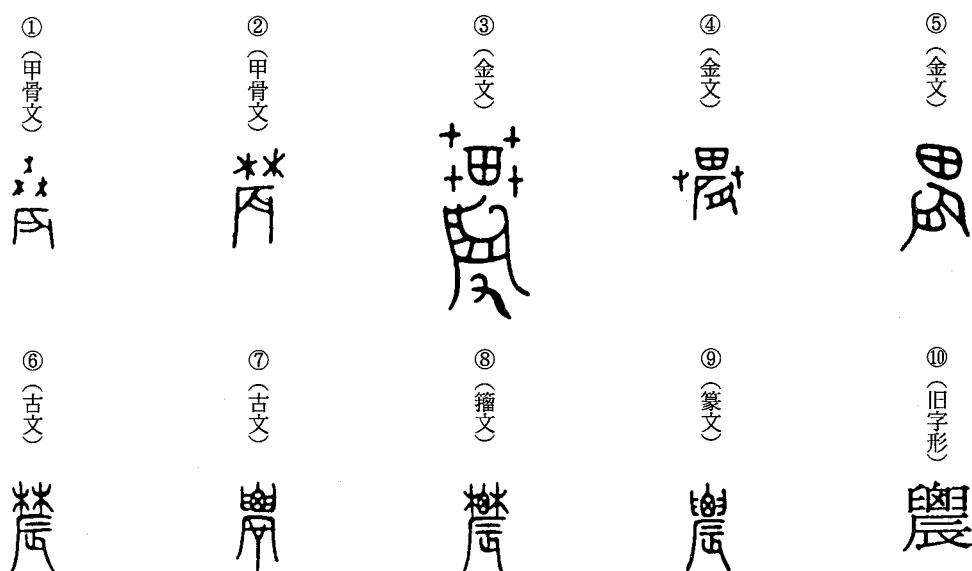
9) 長くとも殷代後期の1300 B. C. ～列国期末の221 B. C. の約1000年になるようである。前半の500年が彝器(祭器)文化で、うち初めの殷周期の約300年は主に酒器として、次の西周期の約200年は盛食の器(鼎)や楽器(鐘)として発展するが、後半の春秋・戦国の列国期の500年は嫁入り用の腰器の類といった装飾風のものが増加し衰頹をみせるらしい。なかでも975 B. C. ～770 B. C. にあたる「西周期の彝器はその銘文において最も貴重な資料を残している。」(白川静『金文の世界』平凡社東洋文庫、1971年、14頁)とされる。

10) 倉石武四郎『岩波中国語辞典』(1963年)760頁、香坂順一・太田辰夫『現代中日辞典』(増訂版、光生館、1969年)部首索引の6頁、18頁。

11) 前掲『字統』『字統の編集について』19頁。

12) 漢字を成り立ちと用法のうえから六種に分類したものである六書(リクショ)については、例えば鎌田正・米山寅太郎『大漢語林』(大修館書店、1992年)126頁、参照。

図1 農の展開過程



いま問題にしている現代中国語の「农」の元の漢字は会意文字である。会意とは、もともと象形的に成立してきた複数の文字を合成することで新たな観念を打ち出すもので、文字の構成要素を意味的に結合させることが特質になっている¹³⁾。とすれば、このばあい、漢字の造形過程における基礎的構成部分であるがゆえに、字義を解してゆくうえで要点となり、諸漢字編成上のキイである部首が、「農」から「农」に変形されることで、表意機能喪失のまま暴力的に転換されてしまっているのである。

書写に困難を引きおこしがちな筆画が多めの漢字はたとえ正字であっても繁体字とみなされ、それを簡略化した文字の方が正字を追いやって規範文字として採用された、これが簡化字であるが、その簡略化の7方式(①もとの字形の一部だけを採り改造する。務→务, 處→处 ②偏旁を変える。劉→刘, 筆→笔 ③同音字で代替する。假借文字の原理の利用。穀→谷, 麵→面

④会意文字の原理を利用する。淚→泪, 竈→灶 ⑤形声文字の原理を利用する。驚→惊, 膚→肤 ⑥草書体を楷書化する。長→长 爲→为 ⑦筆画の少ない古字等を採用。電→电, 鍼→针¹⁴⁾のうち、「农」のばあいはどれになるのだろうか。定かでないものの、強いてさぐり仮に簡略化方式⑥とすれば、例えば孫虔禮の書体¹⁵⁾などを簡化字作造の参考にしたのかもしれないが、とても「农」が「農」の内在的変形体とは認め難い。ひたすら便宜的な近似性を求め、結果として客観的には、まるで衣と一(ワ冠)を機械的に合成したもの、悪しき異体字が出来てしまったと受けとられてもしかたがあるまい。画数が減少した分はやく書けるようになり、また視覚的にも伝達しやすく、活字メディアと電波メディアのいずれにおいてもマス・メディアにふさわしい簡体字なのかもしれないが、まことに機械文明妥当のかもしれないが、文字史的には

13) 前掲『字統』『字統の編集について』3-4頁。

14) 前掲『大漢語林』1071頁。

15) 『五體字類』(西東書房, 1916年) 517頁。

文化価値喪失であろう。これ程になれば超略字化というべきで、農〔農〕ならまだ残されていた字源遡及の手がかりが完全に消失してしまっているといえよう。

こうした難点をもつ現代中国語の漢字もどきの簡化字からは遠く離れるに如くは無い。それゆえ元にもどるわけで、農〔農〕とそれに関連してくる漢字については、註記しておいた『字統』——それは白川静博士の世界的偉業である画期的字書——に依拠することが出来る。同書には、農〔農〕の古代文字の資料として、甲骨文（卜文ともいう）2字、金文3字、『説文解字』（15巻、後漢の許慎の著、漢字の字形学的な字書の聖典とされてきたもので西暦100年成る）所収のもの4字、計9字が掲げられている¹⁶⁾。それを転載したのが図1である（ただし、白川博士がつけられた甲骨文と金文を示す印は除き、また9字の排列に変更を加え、さらに①～⑨の番号をつけたこと、そして⑩として農の旧字形とされる「農」も掲げてあることをお断りしておく。なお、①②は甲骨文、③④⑤は金文であり、⑥⑦⑧⑨は『説文解字』に収める字形であるが、⑥⑦は古文¹⁷⁾、⑧は籀文¹⁸⁾、⑨は篆文¹⁹⁾であるので、そのように丸番号の下へ括弧書きしておいた）。

図1でもって農という漢字の根源からの展開過程を示そうとしているのである。

だいたいにおいて甲骨文からは「森」や「林」の初形と「辰」の初形とが見出だされるのであり、①の字形は森と辰とに従い、②の字形は林と辰とに従う。辰は、蛤（円なる貝である「はまぐり」特に「おおはまぐり」）や蚌（長き貝

である「からすがい」「どぶがい」）といった二枚貝の象形で蜃（シン、かい・はまぐり）の初文、その殻は蜃器として用いられたから、辰が農具としての蜃器であることは解字史のうえで確定している。

が、問題はここから始まる。第1に、蜃器はいかなる用途の農具なのか、である。これについては必ずしも自覚的とはいえないが、二様の解釈がなされており、それにしたがって結果的に事実上三説があるといえる。

一つは草刈用具説——例えば「蜃は古く草刈りの器として農耕に用いられ、農の字もその形に従う。」²⁰⁾ 他方で農耕用具説——例えば「甲骨文は、辰+林。辰は、二枚貝の象形。林は、はやしの意味。貝製の農具で、林野をたがやすの意味を表す。」²¹⁾「辰は象形で蜃の初文。その肉は呪的な意味をもつものとして、祭儀や予兆のことに用いられた。またその殻は蜃器、耕耘の器として古くから農耕に用いられた。」²²⁾ このように「草刈りの器」あるいは「耕耘の器」とする『字統』は蜃器を「貝で作った耕耨の器」²³⁾ ともしている。

いずれにしろ、草刈用具説と農耕用具説が存することになるが、草刈用具でもあり農耕用具でもあるという意味での両用説もある。『字統』は実質的にこの説になっているのかもしれないが、比較的はっきりしているのは「辰字の起原を尋ねるに、元は蜃字の転訛せるものなり。蓋し上古農業の有様を察するに、往々貝を農具に用ひたる例あり。此字、恐らくは蜃の殻をば土地を掘り草木を剪る等の用に供したるより起り」²⁴⁾ という新渡戸説である。しかし彼も両用説で必ずしも一貫しているのではなく、例えば「「農」の文字は貝を以て草木を荊除するの意を有し、且つ文字上に現はれざれども、土地を耕

16) 前掲『字統』675頁。

17) 先秦の文字をいう。（前掲『大漢語林』216頁）

18) 西周の宣王時代（827 B. C. ～782 B. C.）に太史の籀が作ったと伝えられるが、大体、東周末期、紀元前4～3世紀ころ秦国地方で用いられたもの。大篆ともいう。（同上書、1067頁、1074頁）

19) 秦の始皇帝が李斯に命じて大篆を基礎として省改を加え、天下に通行させたもの。小篆ともいう。（同上書、1067頁）

20) 前掲『字統』469頁。

21) 前掲『大漢語林』1374頁。

22) 前掲『字統』476頁。

23) 同上書、675頁。

24) 新渡戸（1976）61～62頁。

鋤するの意義を十分に包含し居るが如し。」²⁵⁾というのである。

あくまで推論にすぎないが、新渡戸にあっては蜃器が草刈用具にとどまることなく農耕用具として掘り棒農耕²⁶⁾や除草耕の機能を持つものとイメージされていたふしがある。それにしても不明瞭すぎるのは、農耕用具としての蜃器に必ずしも確信がなかったからであろう。にもかかわらず新渡戸が農耕用具としての蜃器にこだわったのは、農における耕すことの意義をよく認識していたからであろう。

なお、新渡戸は『農業発達史』において、当時の帝国博物館所蔵で陳列もされていたという大牡蠣殻（下総国千葉郡六通村で発見されたものらしい）を「昔時耕作に用ひたる者ならん。」と図入りで紹介しつつ、さらに「牡蠣殻を鍬に用ひたる臆測図」をも掲げることで農耕用具説を打出しているが、あくまで臆測の域にとどまっており、この牡蠣殻のばあいと違って蛤のばあいには「「アイヌ」人種は蛤貝に孔を穿ちて糸若は縄を之に通し、手に巻纏して収獲物を扱落すに用ふるを見る。」と、狩猟民族用の貝庖丁とみなしており、これは蛤という二枚貝が農耕民族用の貝庖丁にもなることを類推させるものであって、いずれにしても新渡戸は「農業と貝殻の関係浅からざるや」と重視するのである²⁷⁾。

蜃器はその素材の性質からして農耕具には難がある。中国農業史の研究は古代農耕具のなかに貝製農具をみとめていないようだ²⁸⁾。蜃器の素材でも例えば蚌は7寸位にまでなるものもあったらしいから²⁹⁾、農耕に用いられることが全く

ないとはいえないにしても、せいぜい浅耕の除草耕で、より深耕の耕起は無理であったろう。したがって農耕用具説はあくまで副次的な説明としてなされるべきであろう。

にもかかわらず何故に草刈用具説が確固とならず、それと対等ないし凌駕的に農耕用具説が入りこむのか。その理由は、甲骨文①②における森や林プラス蜃器という会意文字としての初形が何を意味するのか十分に考察を深めてこなかったからではないのか。

甲骨文にみられる林野と結びついて農事を表意する蜃器であるなら、その機能は農耕用具であるはずだという予断があったのではないか。そういうア プリオリがなせるわざによって蜃器＝農耕用具説が打出されてきたのではないか。

しかし、甲骨文にみられる、まず森（①）、ついで林（②）と結びついて農事を表す蜃器はやはり草刈用具でよい。現に竜山文化（山東と河南を中心とする広大な地域から遺跡が発掘され、仰韶文化に遅れ殷文化に先だつ新石器時代晩期の文化で前2500－1500年ぐらいと推定）のものらしいが大量の貝庖丁・貝鎌が発見されてきているようだ³⁰⁾。それに蜃器＝草刈用具で文字構成上なんら支障はないばかりか、むしろ合理的である。農法上の問題からしてそうなのである。

中国新石器時代の農耕は焼畑式農法で開始されたはずだ。森に焼畑をひらこうとすれば、草木を生そのままではなく、まず刈り倒して乾燥させてから火入れする。こうして焼畑がひろがれば森が林に変わっていく。甲骨文①と②はそうした移行を示しているのであろう。だからといっ

25) 同上書、62頁。

26) Emil Werth, *Grabstock, Hacke und Pflug* (Ludwigsburg, 1954) 邦訳『農業文化の起源』（藪内芳彦・飯沼二郎訳、岩波書店、1968年）参照。

27) 新渡戸稲造『農業発達史』（大日本実業学会、1898年、『新渡戸稲造全集』第2巻、教文館、1969年、所収）585－588頁。

28) 天野元之助『中国農業史研究』（1962年初版、1979年増補版）参照。

29) 新渡戸（1976）60頁。

30) 関野雄「黄河文明の形成」（『岩波講座 世界歴史』4、1970年、所収）参照。また、貝塚茂樹・伊藤道治『中国の歴史』第1巻「原始から春秋戦国」（講談社、1974年）には、竜山文化において「石器は、仰韶文化にくらべて、磨製が大半を占めるようになり、石斧のほか、石鑿、石刀、石鎌、石棒などがあつた。どの石器も、仰韶文化の石器よりも、形がととのっている。

て甲骨文が焼畑式農法全盛期を背景にしていたことにはならない。むしろ前代の支配的な農法が記憶として強く、結果として甲骨文に表意されたとみなすべきだろう。

このように理解してこそ、農の初形において農具が込められているにしても、なぜ蜃器という貝製草刈用具なのか、農具であれば新石器や木器が先行的に大量に存在していたにもかかわらずにである、といった疑問に答えられよう。すなわち甲骨文における森や林と結びつく労働手段は、森林を伐採する石斧や穀物を穂刈で収穫する石庖丁といった磨製石器ではなく、土地(多分に焼畑)を耕起する耒や耜といった木製農具でもなく、草木を刈りはらう蜃器でなければならず、それはこの貝製農具が先鉄器時代において石庖丁と違って根刈りできる鋭い利器だったからではないか。

まことに、中国新石器時代の、農耕が開始されたとはいえ、まだ無文字時代の焼畑式農法が支配的な農耕生活とそれにもとづく思惟が次の文字時代の甲骨文となって表意されるに至ったのである。

ところで、焼畑式農法の遺産が反映している甲骨文に耕地を意味する田のごとき文が入っていないのはむしろ当然である。焼畑式農法の特徴は耕地未確立という点に求めるべきだからである。焼畑式農法から一圃式ないし多圃式農法になって耕地は確立する。次の青銅器時代にはそうした農法の転換が完了し、それは耕地の拡

大に対する森林の減少となり(もっとも森林の減少は金属器文化の発生に伴う有機質燃料資源としての薪炭消費増大も強く作用している)、そのことが金文③④⑤に耕地を意味する田の文が現われると同時に、森林の象形文の漸減となって現われているのである。とすれば、①～⑤は古代中国農業史の一縮図のごとき観がしてよいというものである。

図1に関連しての考察は一応ここでやめるが、以上のような農の展開過程から、農法・耕地・雑草防除という農学の三枢要点が農の初形と初義および変形を通して浮かびあがってくるのである。ここに、中国語としての農という文字を解釈する意義があるといえよう。

そして、この三枢要点はいずれも日本農業分析の視点に欠くことの出来ないものである。農法は水田において穀草式農法あるいは田畑輪換式農法として、畑においては輪栽式農法として提起されるし、耕地は工業化・都市化・食糧海外依存傾斜化の渦中であってその確保をいかにすべきかという課題として提起されるし、雑草防除は農法上の課題のみならず農業の化学化とりわけ農薬多投の問題として提起されるのである。

[5] 日本語。『日本書紀』(720年成る)の巻第5, 崇神天皇にある「農天下之大本也」を、往時の日本人がどう音読していたかは、いわゆる古訓による訓み下し文によって知られる。「なりはひはあめのしたのおほきなるもとなり」となる³¹⁾。「農」は「なりはひ」と音読されていたが、大和言葉の「なりはひ」に外来語の「農」を当てたことになる。万葉仮名(男仮名)では「奈利波比」や「奈里波比」と書かれている。平仮名(女手)で「なりはひ」と書かれたのは『源氏物語』(1001年以降の起筆とされるが成立年代不詳、およそ1001～1011年頃か)

そのほか貝殻で作った刀や鎌もあった。これは仰韶文化では見られないものであった。」(61頁)とある。なお本書では竜山文化にかんして「鍬や鎌には大きな貝殻や大型動物の骨で作ったものがふえ、また木製の二またの鋤なども使われていた。仰韶文化のように、あわやきびはまだ発見されていないが、こうした穀物を蒸すための甑(蒸籠)は、仰韶文化より普及しているから、穀物栽培がいつそう盛んになっていたことがわかる。」(74-75頁)とあるが、ここにいう鍬には獣骨鍬のほかに貝鍬もあるのかどうか不明瞭である。

31)『日本書紀』上(日本古典文学大系67, 岩波書店, 1967年)252-253頁。

「夕顔」の巻が初見のようである³²⁾。

さて、この「なりはひ」のうち、「なり」は作物が生り成るの義で、「はひ」は助辞でそういう状態(なっている)を示している³³⁾。すなわち農作物というモノそのものが大和言葉「なりはひ」の初義であった。まことに日本人らしいというべきか、即物的思惟である。だからといって、必ずしも文化的所産として低度とはいきれまい。このばあい即物的把握の対象になっているのは農作物で、食の対象、食物である。

『日本書紀』の「農天下之大本也」——これが農本主義の始原であるが——は唐の太宗が太子に与えた書と伝わる『帝範』(648年)にある「夫食為人天農為政本」³⁴⁾を参考にしたものであろう。したがって日本独自の思想と喧伝されがちな農本主義も実は唐帝国からの輸入加工品で、それはそれで古代日本知識人の教養を物語るものである(もっとも渡来中国知識人との合作の可能性もある)。

この偉なる先例において、食物は「人天」、すなわち人になくってはならない天のようなものとされていた。人天のごときモノとしての作物が生育し成っていること——その音には古代日本人の喜びがあふれんばかりであったろう——、これが農にあたる日本語「なりはひ」が意味するところであった。なお因に、ドイツ語で食物のことをLebensmittelというが、「生命手段」を意味するこのドイツ語は漢語「人天」と相通ずるものがある。

後代「なりわい」と言いならわし、生業という漢語を当て、職業の日本的表現となっていくが、それ相応の合理があるわけで、農が日本人の職業の太宗であり続けていったからである。

そして、この後義としての「なりわい」も日

本農業分析の一視点として欠いてはならぬものである。農業はかつて日本民族の仕事(work)として生り続けていたし、いま在り続けているし、これからも有り続けねばならぬ使命(vocation)ある職業(occupation)だからである。それはまた民族を越えた、まことに人類にとっての天職(calling)であろう。

[6] ギリシャ語。経済学関係の書名で初めて「政治経済学」(Oeconomie politique)なる語を用いたのはフランスのモンクレチアン(Montchrétien, Antoyne de, 1575~1621)著『経済学概論』(Traicté de l'oeconomie politique, 1615)であった³⁵⁾。以来、Oeconomie politiqueが成語となり、英語 political Economyとなり³⁶⁾、Economyという英語(米語)が確立していったのである。

ところで、元の oeconomie の初形はギリシャ語の *oiko-vomía* である。こうしたギリシャ文字は日本でなじみがうすいので、以下これをローマ字転写で Oikonomia と表記替えしよう。

ギリシャで農の意味に用いられていたのが、この Oikonomia である。これは Oikos (宅地) と Nomos (法制、規則) に分解できる。合わせて「家宅(家屋プラス周辺の地積)の法制」(一家を治めるのに重要な規則の総称)である。つまりギリシャ語では家政法・斉家法の意味であった。なお斉家とは、家庭をととのえおさめる、治家であり、中国の経書で四書の一つ、孔子の遺書といわれ朱子の校訂で決定稿になったという『大学』——学問の根本義を示すとされる——にみえる修養順序として八条目(格物・致知・誠意・正心・修心・斉家・治国・平天下)の一つ。

さて、ではどうやれば家と家人(すなわち家

32) 新渡戸(1976) 57頁、『日本国語大辞典』第15巻(小学館, 1975年) 357頁。

33) 大槻文彦『大言海』第3巻(富山房, 1934年) 678頁。白川静『字訓』(平凡社, 1987年) 574頁。

34) 長澤規矩也『和刻本諸子大成』第四輯(汲古書院, 1975年) 8頁。

35) 舞出長五郎『経済学史概要』上巻(岩波書店, 1937年) 22頁, 小林昇編『経済学史小辞典』(学生社, 1963年) 194頁。

36) イギリスで初めて『経済学原理』の名を冠して

族)を斉える(きちんとする)のかといえば、古代ギリシャでもなお商工業未発達のため、耕作(農)こそが齊家の道だった。英語の Husbandry と相通ずるのであり、農業の普遍的意義がこのあたりにも現われている。

かくて Economy の初形は古代ギリシャの Oikonomia であり、その初義は齊家法で、その具体的な存在形態は家族農業だったのである。古代ギリシャで、ヘーシオドス『仕事と日』(700 B. C. 頃成る)³⁷⁾が生みだされたのも、けだしむべなるかな。この、世界最古の農書には農事(ギリシャでは牧畜を含む)について、「神々が人間に季節に応じてお示しになった仕事にな。」³⁸⁾という意味深い一句がある。

[7] 結語。日本語で農を意味する「なりはひ」の原義が即物的といっても、そのモノは現実的実質的価値ある物で、しかも名誉ある生存の手段である。物的把握が思想的把握に劣ることには必ずしもならない。そのモノ次第によっては物的把握が思想的把握を凌駕しうる。とりわけ現代経済がますます入り込む対国際連関においては、物と思想では外的被拘束の重みが違

う。思想はコスモポリタンの(全世界的)性質をもつから、諸思想を世界から教わるという意味での「心の束縛」³⁹⁾はあっても、それは衣裳のごとき重さにすぎず、あたかも「いつでも脱ぐことの出来る薄い外衣」⁴⁰⁾のごとく脱ぎ替えるのは難事ではない。束縛がもつ危険度は比較的小さいとみてよい。

ところが食糧を国際商品と甘く見て海外依存を主とすることからくる「胃の束縛」⁴¹⁾は死命を制しかねないがゆえに、悲惨と墮落をもたらしかねないという意味で、束縛のうち最も危険なものとなる。思想の分野ではなく、物の分野においてこそ、コスモポリタン(全世界)主義は致命的な有害作用を及ぼすことともなるのである。禁欲的な筋金から、とおに脱却し、むしろ欲望増殖的な資本主義の世界的展開が今それを露わにしつつある。日本も、いわば先祖がえりの脱亜入米型としてアジア最大の資本主義国となって遂に lofty ambition⁴²⁾ (by W.S.Clark in August 14, 1876)を達成したかのようである。

出版されたのは、アダム・スミス『諸国民の富』(1776年)より10年前にでた Sir James Steuart (1712~1780), *An Inquiry into the Principles of Political Oeconomy* (1767)である。

37) Hesiod, *Erga kai Hemera* (英訳 *Works and Days*) 松平千秋訳『仕事と日』(岩波文庫, 1986年)

38) 同上書, 58頁。

39) 41) UCHIMURA Kanzo, *How I Became A Christian : Out of My Diary*. By A "Heathen Convert" (1895) 邦訳『余は如何にして基督教徒となりし乎』(鈴木俊郎訳, 岩波文庫, 1938年初版, 1958年改版) 184頁。

40) Max Weber, *Die Protestantische Ethik und der Geist des Kapitalismus* (zuerst 1904/1905, 1920) 梶山力訳『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』(有斐閣, 1938年) 244頁。

42) 札幌農学校校友会編『札幌農学校』(裳華房, 1898年) 参照。